かかわり合い学び合う中で
確かな学力を身に付ける学習指導のあり方
～言語活動を充実させ、ともに「言葉の力」を育成する指導の工夫～

下松市立中村小学校

Ⅰ　研究の概要

1　研究主題設定の理由

本校では、昨年度「かかわり合い学び合う中で、確かな学力を身に付ける学習指導のあり方」という研究主題のもと、「言語活動を充実させ、ともに言語・表現能力を高めさせる指導の工夫」という副主題を掲げ、「子どもたちの主体性を高める工夫」「言語・表現能力の向上に向けての工夫」「確実な定着に向けての工夫」の三つの視点から校内授業研究、一人一授業の取組、中学校との連携や幼保小連携の課題解決等を通して多くの実践を行ってきた。さらに、学校運営協議会のもと、コミュニティ・スクールを活用した数々の取組も実践した。その中で、児童の実態をよく見極め、どのような言語活動が適切であるか指導者がしっかり把握して単元計画を工夫することで、子どもたちの主体性を高めることができた。また、学習活動の中にペア学習やグループ学習の場を設けて互いの考えを確認させたり意見を交流させたりする中で、友達とのかかわりを活性化させ、深めさせることができた。さらに、振り返りの観点や話型の提示をしたり、つなぎ言葉を生かして友達の意見をさらにつなげ、広げていったりするなど各教科の特質を生かした取組もあり、表現能力の向上を図ることができた。子どもたちが自らの学びを振り返る力をつけることは、学習への達成感や充実感を高めることにもつながり、次時への主体的な学習へと展開することができた。

本校の子どもたちは、素直で明るく、何事にも前向きに取り組み、頑張ろうとする姿が見られる。全国学力・学習状況調査等の結果からも重点的に指導した項目への改善が図られ、数値的にも向上してきている。しかし、自分で判断して行動したり、経験を生かして臨機応変に判断して行動したりする積極性に欠ける面があり、仲の良い友達とは進んでかかわるが、それ以外の友達への広がりが見られない。また、友達の考えと比較したり関連付けたりすることや、自分の考えを分かりやすく相手に説明したりする力が不十分である。また、学力向上の面からも、必要な情報を読み取り、条件に沿って自分の考えを記述することを不得手としている。このことからも、更なる表現能力の向上をめざして、効果的な授業スタイルを構築することが今後の課題であると考える。

そこで、本年度の研究主題を「かかわり合い学び合う中で、確かな学力を身に付ける学習指導のあり方」とし、副主題を「言語活動を充実させ、ともに『言葉の力』を育成する指導の工夫」と設定した。「言葉の力」は、あらゆる知識の獲得と能力の形成にかかわるものであり、思考そのものを支えるものである。また、論理的思考力や創造性の基盤ともなる。さらに、様々な表現などに触れ、豊かな感性や情緒を培うことができる。そして、言葉や文字などによって意思や感情を伝え合うことで、人間関係形成能力や目的や場に応じて効果的に発表・提示する能力を伸ばすことができる。つまり、「言葉の力」は、全ての教科等における学習の基盤となるものであり、「言葉の力」を育成することで、児童に確かな学力を身に付けさせることができると考える。児童一人ひとりが自分のこととして学習対象（ひと・もの・こと）とかかわり、積極的に課題を追究しようとする力を伸ばすこと、子どもたち相互のかかわりや対話を活発にし、その中で子どもたち自身の思考をより深め広げること、教師や友達の話を主体的に聞き、自分のものとして再構築し、書いたり話したりすることのできる子どもを育成することは、対話的な学びの土台づくり

にもつながるのではないか。このような考えを踏まえながら、新学習指導要領のポイントである「主体的・対話的で深い学び」をより意識し、次の研究仮説を設定した。

2　研究仮説

○　子どもが学習対象に主体的にかかわり、友達と学び合うことで、自分では気づかなかった新しい価値を発見し、学びを深めたり学ぶ楽しさを味わったりすることができるだろう。
○　対話的で深い学びを促し、子どもが自らの成長や変容を実感できる指導方法を工夫することで、確かな学力を身に付け、積極的に学ぼうとする姿勢を形成していくことができるだろう。

3　研究の視点

【視点①】子どもたちの主体性を高める工夫（つかむ）
・単元全体を見通した単元構成の工夫
・教材との出合わせ方の工夫
・問題意識が明確にもてる課題の工夫

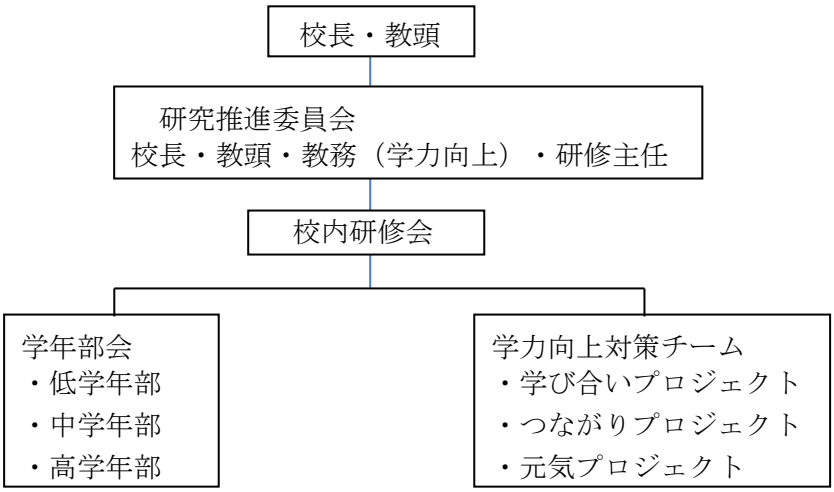
【視点②】対話的で深い学びを促す工夫（かかわり合い学び合う）
・各教科の特質を生かした「話す」、「聞く」、「読む」、「書く」場の設定
・かかわり合いや学び合いの必然性を感じさせる発問や場の工夫
・必要な情報を活用しながら、条件に沿って自分の考えを記述し説明する場の設定
・話し方、聞き方の型やチェックリストの活用

【視点③】自らの学びを振り返り、自他の成長や変容を実感させる工夫（振り返る）
・学習をまとめたり振り返ったりする時間の確保
・教科や教材の特質、発達段階、時間等に応じた振り返り方法の工夫

4　研究の方法

（1）校内授業研究会（年３回　低学年・中学年・高学年）
（2）一人一授業の公開
（3）小中連携、幼保小連携、学力向上に向けた研修の活用

5　研究組織



Ⅱ　研修経過

月　　日　　曜日	内　　容
４・１１（水）	危機管理ミニ研修（エピペンの使用法について）
４・１８（水）	本年度の副主題、視点の検討
５・　９（水）	学力向上・プロジェクト別研修①
５・２３（水）	校内研究授業指導案検討① （高学年　５年生　道徳　竹田　綾香教諭）
５・３０（水）	危機管理研修（心肺蘇生法について）
７・　４（水）	校内研究授業①　高学年　道徳　竹田　綾香教諭 ほんとうの友情「ミレーとルソー」 指導者　下松市教育委員会　学校教育課 指導主事　　徳永　淳一様
７・２４（火）	保健安全教育 学力向上①（学力テストの分析）
７・２６（木）	学力向上②（学力テストの分析） 学力向上・プロジェクト別研修②
７・２７（金）	特別支援教育　講師　下松小学校　上杉　まどか様 人権教育研修
８・２３（木）	幼保・小連携研修（潮音保育園　保育参観） 道徳科の評価の在り方について 講師　下松市教育委員会　学校教育課 指導主事　　徳永　淳一様
８・２４（金）	綱紀保持研修 教育課程の復伝 生徒指導・コミスクについて
８・２７（月）	外国語活動の進め方と教具・教材づくり コミスク熟議
９・２６（水）	校内研究授業指導案検討② （低学年　２年生　国語　藤野　ミチル教諭）
１０・２４（水）	校内研究授業②　低学年　国語　藤野　ミチル教諭 どうぶつのすごいひみつクイズをつくろう 「ビーバーの大工事」 指導者　山口大学附属光小学校　教諭　住江　めぐみ様
１０・３１（水）	校内研究授業指導案検討③ （中学年　３年生　外国語　正司　みさと教諭）
１１・１４（水）	校内研究授業③　中学年　外国語　正司　みさと教諭 Let’s　Try　Unit６　ALPHABET 指導者　光市室積小学校　教諭　山田　浩史様
１・　７（金）	学力向上・プロジェクト別研修③
１・２３（水）	「校内研究のあゆみ」作成について
３・　６（水）	学力向上・プロジェクト別研修④

Ⅲ　今年度の研修の成果と課題

研修主題のもと「言語活動を充実させ、ともに『言葉の力』を育成する指導の工夫」として３つの視点から各教科で実践を重ね、以下のような成果や課題を得ることができた。

【視点①】　子どもたちの主体性を高める工夫

それぞれの実践において、様々な視点から授業を見つめ直し、子どもたちの主体性をより高めることを意識した授業改善を行った。まず、各クラス共通で、「めあて」「まとめ」「振り返り」のプレートを使用し、１時間の流れを意識した授業構成での指導を継続した。特に、「めあて」の提示で、子どもたちに本時の学習は、どのようなねらいでどんな力を付けるための学習なのかを説明することを心掛けてきた。すると、本時の学習で身に付けるべきことを意識して、見通しをもって主体的に学習に参加しようとする子どもたちの姿が見られるようになった。特に道徳では、子どもの実態に合わせて資料を提示するなど、子どもと教材との出合わせ方を工夫することや主発問を吟味して、思考を促す発問を子どもたちに提示することが、道徳的価値を主体的に考えようとする子どもの育成につながってきたと感じる。国語では、読み取った内容や自分の考えを図や絵で表現させることで、どの子どもも課題意識を明確にもち、学習に参加する様子を見ることができた。外国語活動では、子どもたち一人ひとりに外国語でのコミニュケーションに自信をもたせることが主体性を高めることに結び付くことがわかった。そのためには、日ごろから、外国語が身近なものと感じられるように教室内の環境構成の工夫や授業では外国語を使う必然的かつ具体的な場面を設定すること。さらに、計画的に時間配分を行い、子どもたちが表現に慣れるためのメインアクティビティーの時間を十分に確保することが有効であった。これらの点を参考に、これからは、単元全体を見通すことで学習活動を工夫し、より主体的な学習が展開できるよう改善を図っていきたい。

【視点②】　対話的で深い学びを促す工夫

ペアトークや班での話合い、立場を明確にしての議論などを多く取り入れたことで子どもたちが話合い活動を楽しみにしており、自分の意見を友達に伝えたいという気持ちや友達の意見を聞こうとする意識の高まりを感じた。協力しなければならない課題を設定して話合いの場を設けたり、全員が意見をもち、その意見が分かれるような発問を取り入れたりすることで、子どもたちの間に意図的に話合いの必然性を生じさせることができた。その中で、子どもたちは集団で学ぶことの良さを感じ、他人の思考が自分自身の思考を磨くことにつながっていくことに気付き、互いの存在や考えの相違を自分の学習を深める貴重なものと認識し始めてきたように思える。

しかし、全体交流の中では、子ども同士をつなぐためには、教師の力が必要であり、子ども対子どもでの対話で意見を広げていくことが難しい。今後、話合い活動を充実させるためには、１対１のペア活動を充実させ、しっかりと話す経験を積ませたり、全員が話合いに抵抗なく臨めるように話型を示したりする支援が必要であろう。順序立てて説明することや何をどのように使って説明すれば、相手にわかってもらえるのかということについても子どもたちに経験を重ねさせ、習得を図ることが今後の課題と言えるであろう。

これからは、問題解決していく思考力や学びに向かう力がますます重要視される。学びの充実に向けて、獲得した「知識・技能」に友達の考えを取り入れて自分の考えを深め、自分のものとして再構築することができる子どもの育成に努めたい。

【視点③】　自らの学びを振り返り、自他の成長や変容を実感させる工夫

振り返りの時間を大切にする教師の意識が高まり、日頃の授業でもその時間を確保できるようになってきており、学習の流れの中に「振り返り」が定着してきた。子どもたちにとっても、振り返ることが学びの充実感を高める経験につながり、自分の成長を感じとる時間となってきている。今後は、その「振り返り」で把握した課題を、予習・復習に活用したり、子どもたちの振り返りをもとに次の授業を仕組む機会を増やしたりするなど振り返りの活用法を模索し、その役割をより明確なものとして位置付けていきたい。